

蛇に嫁ぎし女を医師治せる語^{ことば}

蛇、女陰を見て欲を発し、穴を出でて刀に当たりて死にたる語

蛇、僧の昼寝のまらを見て呑み、姪を受けて死にたる語

蛇¹といえは今昔物語には道成寺の話もありますが、今回は：

蛇に嫁ぎし女を医師治せる語（今昔物語集巻二十四第九）

今は昔、河内の国、讚良の郡、馬甘^{うまかい}の郷に住む者ありけり。下姓の人なりといへども、大きに富みて家豊かなり。一人の若き女子あり。

四月の比、その女子蚕養^{こがひ}の為に大きなる桑の木に登りて桑の葉を摘みけるに、その桑の道の辺^{ほとり}にありければ、大路を行く人の道を過ぐとて見ければ、大きなる蛇出来て、その女の登れる桑の木の本を纏^{まと}てあり。路を行く人これを見て、登れる木に蛇纏^{まと}へるよしを告ぐ。女これを聞て驚きて見下したれば、実に大きなる蛇、木の本を纏^{まと}へり。

その時に女恐^{おそ}じ迷^{まど}て、木より踊り下るる、蛇、女に纏^{まと}付きて即ち婚^{とつ}ぐ。しかれば、女焦^{こが}迷^{まど}て死にたるが如くして、木の本に臥す。父母これを見て泣き悲むで、忽^{たちまち}に医師を請^こじて、³これを問はむとするに、その国に止事^{やんごと}無き医師あり。これを呼びて、この事を問ふ。その間、蛇、女と婚^まぎて離れず。医師の曰く、「先ず、女と蛇とを同じ床^{とこ}に乗せて、速^{すみやか}に家に率^すて返りてば、庭に置くべし」と。しかれば、家に率^すて行きて、庭に置きつ。

その後、医師の言ふに随ひて、稲塚^{いなづか}の藁^{わら}三束^{さん}を焼く。三尺を一束に成して三束とす。湯に合せて汁三斗^{さん}を取て、これを煎じて、二斗に成して、猪の毛十把^{じゅう}を尅^くし末して、その汁に合せて、女の頭に宛てて足を釣^つり懸けて、その汁をつび⁶の口に入る。一斗を入れるに即ち離れぬ。這^はて行くを打殺して棄つ。その時に蛇の子凝りて蝦蟇^{かえる}の子の如くにして、⁷その猪の毛蛇の子に立て、つびより五升ばかり出づ。蛇の子皆出畢^{いでは}ぬれば、女悟驚^{さめおどろ}て物を言ふ。父母、泣々この事どもを問ふに、女の曰く、「我が心更に物思^{おも}えずして、夢を見るが如くなむありつる」と。

されば、女薬⁸の方に依て命を存する事を得て、慎み恐れてありけるに、その後三年ありて、またこの女蛇に婚^まぎて、遂に死にけり。この度は「これ前生の宿因なりけり」と知りて、治する事無くて止にけり。

但し、医師の力・薬の験^{げん}不思議なりとなむ語り伝へたるとや。

1 傍線は読解に役立つ重要語。数字は読解で意識するポイント。なお、今昔物語は、平安の「かな」文体ではなく、漢文調で記述されており、漢文学習者にはよくお目にかかる文字・読みが多い。一部送りがなや仮名遣いが本則じゃない。(岩波文庫版利用)

2 とつぐ＝如継ぐの意で元々は交合する・セックスするの意味。即物的で源氏物語には出てこない言葉。
3 娘を診てもらおうとする

4 床＝戸板

5 刻んで粉末にして

6 つび(開)＝女陰

7 蛇の子がカエルの卵のようにイノシシの毛に刺さって女陰から五升出てきた。なんかグロい。

8 薬の調合のおかげで

蛇、女陰を見て欲を発し、穴を出でて刀に当たりて死にたる語（今昔物語集卷二十九第三十九）

今は昔、若き女のありけるが、夏比、近衛の大路を西様に行けるが、小一条と言ふは宗形なり、その北面を行ける程に、小便の急なりけるにや、築垣に向きて南面に突居て尿をしなければ、共にありける女の童は大路上に立ちて、「今やしはてて、立々」と思ひ立ちけるに、辰の時許にてありけるに、漸く一時許立たざりければ、女の童、「こはいかに」と思いて、「やや」と言いけれども、物も言はでただ同じ様にて居たりけるが、漸く二時許にも成にければ、日も既に午時になりけり。女の童物言へども、いかにも答へもせざりければ、幼き奴にて、只泣立てたりけり。

その時に、馬に乗りたる男の、従者あまた具してそこを過ぎけるに、女の童の泣立てりけるを見て、「あれはなど泣くぞ」と、従者を以て問せければ、「しかしかの事の候へば」と言ければ、男見るに、実に女の中に結て市女笠着たる、築垣に向て蹲に居たり。「これはいつより居たる人ぞ」と問ければ、女の童、「今朝より居させ給へるなり。かくて二時には成りぬ」と言て泣ければ、男、怪しがりて、馬より下りて寄りて、女の顔を見れば、顔に色もなくて、死にたる者の様にてありければ、「こはいかに。病の付きたるか。例もかかる事やある」と問いければ、主は物も言はず。女の童、「前にかかる事無し」と言へば、男の見るに、無下の下衆にはあらねばいとおしくて、引立けれども、動かざりけり。

さる程に、男、急と築垣の方を、おもはず見やりたるに、築垣の穴のありけるより、大なる蛇の、頭を少し引入て、この女をまもりてありければ、「さは、この蛇の、女の尿しける前を見て、愛欲を発して蕩たれば、立たぬなりけり」と心得て、前に指したりけるとひの劍の様なるを抜きて、その蛇のある穴の口に、奥の方に歯をして強く立てけり。

さて、従者共を以て女をすくひあげて、引き立ててそこを去りける時に、蛇、俄に築垣の穴より、鉾を突く様に出ける程に、二つに割けにけり。一尺ばかり割けにければ、え出でずして死にけり。早う、女をまもりて蕩してありけるに、俄に去りけるを見て、刀を立てたるをも知らずに出にけるにこそは。しかれば、蛇の心は、あきましく怖しきものなりかし。諸の行来の人、集りて見けるも理なり。

男は、馬に打乗りて行きにけり。従者、刀をば取りてけり。女をばいぶかしがりて、従者を付けてぞたしかに送りける。しかれば、よく病ひ

9 お供の召使いの女の童は大路にいた。

10 今にし終わって立つか立つか

11 一時（ひととき）は2時間

12 小便をしている陰部を見て愛欲を起こして女の正気を失わせたので女が立ち上がれなくなつただ

13 氣遣つて

14 重病人のように手をとられてよろよろと行つた

したる者の様に、手を捕られてぞ漸く行ける。男、あはれなりける者の心かな。互いに誰とも知らねども、慈悲のありけるにこそは。その後の事は知らず。

されば、これを聞かむ女、さようならむ¹⁵にむ敷に向いて、さようの事はすまじ。

これは、見ける者共の語りけるを聞継ぎて、かく語り伝へたとや。

15 いや、敷じゃなかつたやろ。とつつこんでみる。

蛇、僧の昼寝のまらを見て呑み、姪を受けて死にたる語（今昔物語集 卷二十九第四十）

今は昔、若き僧のありけるが、やむごとなき僧のもとに宮仕しけるありけり。妻子など具したる僧なりけり。

それが、主の共に三井寺に行たりけるに、夏比、昼間にねぶたかりければ、広き房にてありければ、人離れたる所に寄て、長押を枕にして寝にけり。よく寝入りたりけるに、驚かす人もなかりければ、久しく寝たりける夢に、「¹⁶美^{うるわし}き女の若きが傍に来たると臥して、よくよく婚^{とつぎ}て姪^{いん}を行じつ」と見て、きと驚き覚めたるに、傍を見れば、五尺許^{ばかり}の蛇あり。おびえてかさ起きて見れば、蛇、死にて口を開けてあり。あさましく恐しくて、我が前を見れば、姪¹⁷を行じて湿たり。

17 射精をして湿っている。

「さは、我は寝たりつるに、美き女と婚ぐと見つるは、この蛇と婚ぎけるか」と思ふに、物も思えず恐しくて、蛇の開たる口を見れば、姪¹⁸口¹⁹にありて吐出したり。これを見るに、「早う、我がよく寝入にけるまらの発^{おこ}たりけるを、蛇の見て寄りて呑みけるが、女を嫁^{よめ}とは思えけるなりけり。さて、姪を行じつる時に、蛇のえ堪へで死にけるなりけり」と心得るに、あさましく恐しくて、そこを去りて、隠れにまらをよくよく洗

18 精液が口にあつて吐き出してある。

19 男根が勃起していたのを

いて、「²⁰この事人にや語らまし」と思けれど、²¹「よしなき事人に語りて聞えなば、」蛇に嫁ぎたりける僧なり」ともぞ言はるる」と思ければ、語らざりけるに、尚この事あさましく思えければ、遂によく親しかりける僧に語りけるに、聞く僧もいみじく怖じけり。されば、人離れたらむ処にて、独り昼寝はすべからず。しかれども、この僧、その後別の事無かりけり。「畜生は人の姪を受けつれば、え堪へで必ず死ぬ」と言ふは、まことなりけり。僧も臆病に、しばしは病付きたる様にてぞありける。

20 この珍事を人に語るうかと思つたが

21 つまらないことを人に語つて噂になつたら「蛇と交つた僧だ」と言われるかもしれない。

この事は、その語り聞かせける僧の語けるを聞たる者の、かく語り伝へたとや。